資　　料

１年次前期の基礎看護学実習が初期学生の「学び」と職業に対する「思い」に及ぼす影響

相撲佐希子

The Effect of Basic Nursing Practice in The First term, on Learning and Career Mindset in FIRST-Year Students

Sakiko Sumai

キイワード：１年次、前期、基礎看護学実習、学び、思い
key words：First term，Basic Nursing Practices，Learn，Mindset

要　旨

基礎看護学実習における体験が、初期学生の「学び」や職業に対する「思い」に及ぼす影響について明らかにすることを目的に、基礎看護学実習を履修した78名に、実習終了後に実習での体験や実習達成度の自記式質問紙調査を行った。その結果、職業に対する「思い」については、自ら看護職を選択して入学した学生は約70％を占め、入学後から基礎看護学実習前までの間に職業に対する思いが低下した学生はわずか8.3％のみであった。また、基礎看護学実習終了後には、約60％の学生が看護師になりたい気持ちが「高くなった」と示していた。

学びについては、実習での困難感として知識のない未熟な自分や、コミュニケーションの難しさを示す一方で、コミュニケーションの必要性に気付かされたことを自己の成長として捉えていた。また、実習達成度の平均点は４点満点中3.27（±0.61）点で、「ほぼ達成できた」の評価を示していた。

１年生前期に行われた基礎看護学実習での体験は、学生の看護師になりたい気持ちを高める要因になり、看護学生として自己の学習の在り方を見直すきっかけになっていた。また、学生が実習で体験した困難感を実習後の学習課題や目標とすることが出来ていた。

以上から基礎看護学実習は、学生の看護師になりたいという職業に対する「思い」を高めることや困難感から得た「学び」を達成するための新たな目標を設定するきっかけになることが明らかとなった。したがって、早期に基礎看護学実習を実施していけば、このような自己の学習の在り方について、早い時期に見直すことになるため、その後の学習に対する良い動機づけとして効果があると示された。そして、学習動機が学習意欲として継続できるような関わり方を検討する必要があると示唆された。

受付日：2014年５月12日　　受理日：2015年８月７日
愛知きわみ看護短期大学　Aichi Kiwami College of Nursing

Ⅰ．はじめに

看護学実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行い、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する（文部科学省，2002，p.1）。本稿に示す基礎看護学実習とは、入学後に初めて学生が現実の看護に触れることにより学内で学んだ理論や技術について「イメージする」レベルを、実際の体験から「わかる・知っている」レベルに発展させる場である。このような臨地での学習は、人間的関わりを介して遂行するという側面が強いため、学内での学習が終了した高学年次に限られるものではなく、早期の学年次から組み込む工夫が必要と示されている（文部科学省，2002，p.2）。特に、基礎看護学実習はできるだけ早期に体験させることで学習の動機づけになる（岩脇・滝下・今西，2008，p.32）とし、入学間もない学生が臨地で看護を学ぶことは、その後の学習の動機づけ（桜井・山口，1999，p.25；高橋・中野，2003，p.37）になると報告されている。また、その他先行研究（渋谷・池内・坂間，2010，p.56；田邉・杉山・須田，2010，p.33；田中・中原・渡邊，2005，p.38）によっても早期体験実習の検討がされているように、初期学生が最初に出会う看護であるため、その後の効果を期待していることが伺われる。

早期体験実習については、専門知識が少ない低年次は医療者でも患者でもない第三者の立場から医療現場を観察できる（駒沢・飯塚・筒井，2003，p.194）利点が示されている。また、早期体験実習の中で、学生が何を思い感じて、何を体験したかはその後の学生の成長に大きく影響を及ぼすとある（岩脇・滝下・今西，2008，p.32）。正野・鷹居・井野（2009）は、医学部１年次を対象に早期体験実習を行った結果について、医療現場を知ることで今後の学習課題が明らかとなり、医学生としての自覚が生まれたと報告している（p.374）。したがって、入学後の早い時期に看護学実習を実施することは、医療現場の中で働く看護師の役割についてイメージしやすくなり、看護職を目指す意識が高まると推察する。原田（2004）は、臨地実習における様々な困難を乗り越えている中で得られた達成感は学習意欲を向上させ、主体的な学習を促すと述べる（p.93）。一方、臨地実習で、否定的な感情をもたらすような体験は学生の自己評価を低下させ、適性への不安にも繋がるとある（白鳥，2009，p.119）。早期体験実習が肯定的な印象であれば、その後に直面する厳しい現実や責任の重さなどの現実を知っても（小薮，2007，p.28）、それを乗り越えるきっかけになると推察する。しかし、初期学生に最も良い影響を与える基礎看護学実習の時期については、未だ検討中である。そこで、前期終了前の７月中旬から実施された基礎看護学実習が、初期学生の「学び」や看護師という職業に対する「思い」にどのような変化を与えたのか実態を明らかにし、早期体験実習の在り方や実習時期の妥当性を検討する基礎的資料としたい。

Ⅱ．概念枠組み

［用語の定義］

本研究で用いる用語については、以下の通り定義する。

基礎看護学実習：基礎看護学実習は１年次に基礎看護学実習Ⅰ：１単位（45時間）と基礎看護学実習Ⅱ：２単位（90時間）を履修する。本稿で述べる基礎看護学実習は、「基礎看護学実習Ⅰ」を示し、１年生の前期１週間の病棟の見学、療養環境の把握ならびに看護の役割を学び、看護者として必要な要素を考えることを目的とする実習を指す。具体的なスケジュールと内容は表１に示す。

学び：看護師を目指す学生が、実習を通して人に対する援助を行うための知識、技術ならびに態度として看護学を学ぶ意味を見出し、前向きに学習に取り組もうとする姿勢。

思い：看護職に対する魅力を感じたり、興味をもつこと。また、看護師になるために必要となる課題を克服していこうとする気持ち、見方。

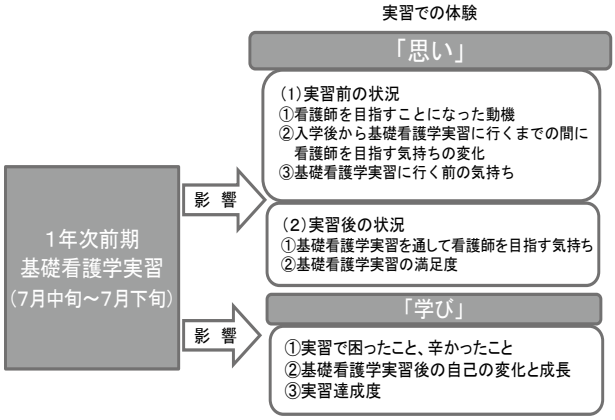

図１．本研究の概念図

表１．基礎看護学実習のスケジュール

実習日	主な実習内容
1日目	病棟オリエンテーション、看護活動見学
2日目 3日目 4日目	看護活動の見学と一部実施
5日目	学内で実習のまとめ、課題レポート作成

Ⅲ．研究目的

１年次前期に実施した基礎看護学実習において初期学生が体験した内容が､「学び」や職業に対する「思い」にどのような影響を及ぼしたのかその実態を明らかにする。

Ⅳ．研究方法

Ａ．研究対象：Ａ看護短期大学１年次生で７月中旬から実施された基礎看護学実習を履修した78名

Ｂ．調査期間・方法：基礎看護学実習の全ての記録物ならびに自己評価の提出後に、自己記入式の質問用紙を一斉に配布し７月下旬～８月上旬の間に各自で回収箱に投函していただくように説明した。

Ｃ．調査内容：早期看護体験実習を通した先行研究（渋谷・池内・坂間，2010，p57；村山・持木･久保，2001，p.68）のうち、学生が体験した内容に関する項目を参考に自ら作成した。質問紙については事前に本対象となる学生以外にプレテストを行い、その結果を参考にして質問項目や表現方法を一部修正した。

質問内容は、以下のように２つの視点から尋ねた。

１．職業に対する思いについて

ａ．基礎看護学実習前の状況：①看護師を目指すことになった動機、②入学後から基礎看護学実習までの間に看護師を目指す気持ちの変化、③基礎看護学実習に行く前の気持ち

ｂ．基礎看護学実習後の状況：①実習を通して看護師を目指す気持ちについて、②基礎看護学実習後の満足度

２．基礎看護学実習での学びについて

①実習で困ったこと・辛かったこと、②基礎看護学実習後の自己の変化と成長、③実習達成度

実習達成度は、基礎看護学実習の自己評価と同様の項目とし、態度などの共通項目を除いた９項目。達成度の視点は、Ａ：ほぼ達成できた、Ｂ：少し指導を受けたが達成できた、Ｃ：かなり指導を受けたが達成できた、Ｄ：指導を受けても達成できなかったとした。

Ｄ．倫理的配慮：筆者が所属する研究機関の研究倫理審査委員会の承諾を得た後に実施した。学生には、研究目的と方法、データ利用と管理方法、研究の自由参加と拒否権の保証、成績には影響しないこと、学会等での公表について文書ならびに口頭で説明した。質問紙は、全ての記録物ならびに自己評価表を提出した後に質問紙を配布し無記名回答とし、質問紙の投函をもって承諾とみなした。

Ｅ．分析方法：全ての設問については基本統計にて傾向をみた。実習達成度については、Ａ＝４点～Ｄ＝１点と点数化し、項目毎の平均値（SD）を算出した。全ての統計はIBM SPSS Statistics22を使用した。

Ⅴ．結果

調査票の回収は38名（回収率48.7％）、有効回答36名（有効回答率46.2％）だった。

Ａ．職業に対する「思い」について－実習前後の変化

調査内容の１．職業に対する「思い」について「基礎看護学実習前・後の状況」を表２に示した。〈看護師を目指す動機〉としては、「自分でなりたいと思った」25名（69.4％）、次いで「家族のすすめ」６名（16.7％）だった。〈入学してから基礎看護学実習へ行く前までの間に看護師を目指す気持ちの変化〉としては、「かわらない」18名（50％）、「高くなった」15名（41.7％）、「低くなった」３名（8.3％）だった。また、〈基礎看護学実習へ行く前の気もち〉は「不安だった」28名（77.8％）が最も多く、「楽しみだった」４名（11.1％）、わずかであるが､「行きたくなかった」３名（8.3％）であった。

次に、基礎看護学実習終了後の状況として〈看護師を目指す気持ち〉については、「高くなった」22名（61.1％）､「かわらない」12名（33.3％）､「低くなった」１名（2.8％）だった。〈満足度〉については「まあ満足」12名（33.3％）、「満足」９名（25.0％）、「とても満足」６名（16.7％）であり、「少し不満」は８名（22.2％）であった。

表２．基礎看護学実習前・後の状況　n=36

		n	%
看護師を目指すことになった動機	1. 自分でなりたいと思った	25	69.4
	2. 家族のすすめ	6	16.7
	3. 資格がほしいから	3	8.3
	4. 特に強い思いもなく	1	2.8
	5. その他	1	2.8
入学後から基礎看護学実習までの間に看護師を目指す気持ちの変化	1. 高くなった	15	41.7
	2. かわらない	18	50.0
	3. 低くなった	3	8.3
基礎看護学実習前の気持ち	1. 不安だった	28	77.8
	2. 楽しみだった	4	11.1
	3. 何も思わなかった	1	2.8
	4. 行きたくなかった	3	8.3
実習を通して、看護師を目指す気持ちについて	1. 高くなった	22	61.1
	2. かわらない	12	33.3
	3. 低くなった	1	2.8
	未回答	1	2.8
基礎看護学実習の満足度	1. とても満足	6	16.7
	2. まぁ満足	12	33.3
	3. 満足	9	25.0
	4. 少し不満	8	22.2
	未回答	1	2.8

B．基礎看護学実習での学びについて

基礎看護学実習において〈困ったことや辛かったこと〉（複数回答）については、図２に示す。最も回答数が多かった項目は、「知識のない未熟な自分」33名、次いで「コミュニケーションの難しさ」23名だった。また、「対象に何もできない自分」は20名、「看護師の仕事の難しさ」については10名だった。

基礎看護学実習後の自分の変化や成長について（複数回答）図３に示した。その結果は、「コミュニケーション能力の大切さに気付いた」31名が最も多く、次いで「相手の気持ちに考慮して行動する必要性に気付く」29名、「看護は責任を伴う専門的な仕事であることへの自覚」23名、「実習への意欲が高まった」22名だった。一方、「看護師になる気持ちがはっきりした」は10名だった。

また、基礎看護学実習の達成度を表３に示すように、９項目の平均値（SD）は3.27（0.61）であり、最も平均値が高かった項目は、「９．今後の学習課題を明確にすることができる」3.71（0.57）であった。次いで、平均値が高かった項目は「３．療養中の患者の生活環境がわかる」3.56（0.50）、「１．病院や診療所、病棟の構造・機能がわかる」3.53（0.65）であった。一方、平均値の最も低かった項目は「６．見学したこと、実施したことを正確に記録することができる」2.67（0.63）だった。

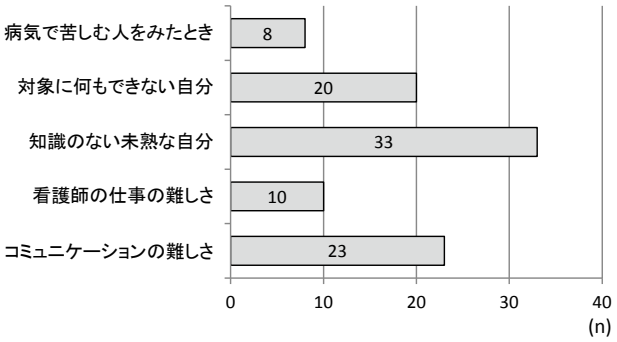

図２．基礎看護学実習Ｉにおいて困ったこと・辛かったこと（複数回答）

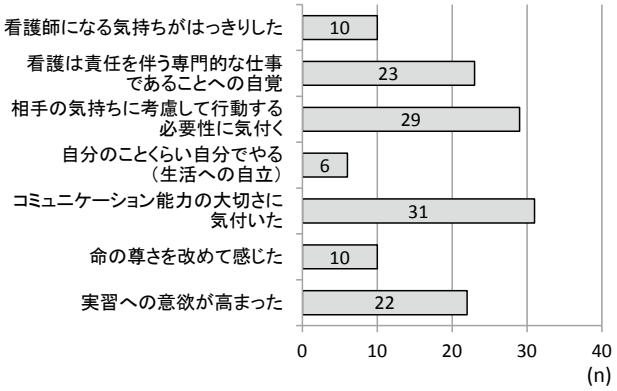

図３．基礎看護学実習Ｉを終えて自分が変化・成長したこと（複数回答）

Ⅵ．考察

大高・伊藤・牟田（2006）の研究において、社会人経験者と未経験者の学生に入学時に看護師になりたい意欲の程度を「非常に強い」「強い」「普通」「弱い」「非常に弱い」で調査した結果、社会人未経験学生の入学動機は、約95％が「普通」以上の回答を選択したと報告している（p.79）。本調査対象者も、看護職を自ら志望している学生が約70％を占め、入学前から看護師になりたい気持ちをもって入学していることが示された。また、入学後から基礎看護学実習へ行くまでにおいて看護師を目指す気持ちが「高くなった」と回答した学生は41.7％、「低くなった」と回答した学生はわずか8.3％であった。さらに、実習終了後に看護師を目指す気持ちが高くなった学生は60％以上を占めていたことから、学内での学習より臨地での実習のほうが看護師になりたい気持ちが高まる傾向があると示された。これは、実際に働く看護職の姿をみて看護に魅了を感じる（桜井・山口，1999，p.24）とのことから、実習での体験は、学生の職業に対する意識を高める要素になると推察する。

一方、基礎看護学実習に行く前の気持ちについて77.8％の学生が「不安」と回答していた。風岡（2005）は、実習や専門看護の講義を受けることによって、看護を職業とすることの厳しさなどを知るため、自分が看護師としてやっていけるのかという不安をもつようになることを示している（p.21）。これらから、学生は、入学から基礎看護学実習へ行くまでの３か月の間に看

表３．実習達成度の平均点

項目	1. 病院や診療所、病棟の構造・機能がわかる		2. 看護活動の実際を見学し、看護の機能と役割がわかる		3. 療養中の患者の生活環境がわかる		4. 対象者に応じたコミュニケーションを図ることが出来る		5. 患者が必要としている通常生活の援助がわかる		6. 見学したこと、実施したことを正確に記録することができる		7. 見学したこと実施したことを正確に報告することができる		8. 看護に必要な要素がわかる		9. 今後の学習課題を明確にすることができる	
	m±SD		m±SD		m±SD		m±SD		m±SD		m±SD		m±SD		m±SD		m±SD	
	3.53	0.65	3.50	0.51	3.56	0.50	3.08	0.65	3.19	0.67	2.67	0.63	2.83	0.74	3.39	0.60	3.71	0.57

護師の役割や実際の技術を学ぶことによって、実習という現実の場に身を置く自分を客観視できるからこそ不安が生じると推察する。つまり、不安を抱くのは職業に対する意識が希望から現実的に捉えるようになったためと考える。

実習の満足度について本調査の基礎看護学実習終了後、75％の学生が「とても満足～満足」を選択し、61.1％の学生が看護師になりたいという気持ちが高くなったと回答している。さらに、実習達成度においては、全体の平均値が４点満点中3.27（0.61）を示したことから、学生は「ほぼ達成できた」と認識している者が多いことが明らかとなった。この結果から、基礎看護学実習での学びが、初期学生にとって相当のレベルであったことが示された。実習の満足度や看護師になりたいという「思い」、ならびに実習達成度は互いに関連があることが推察された。

実習での学びに関することでは〈困ったこと・辛かったこと〉として「知識のない未熟な自分」と回答する者が多く、次いで「コミュニケーションの難しさ」を挙げていた。同時に自己の変化や成長について「コミュニケーション能力の大切さに気付いた」、「相手の気持ちに考慮して行動する必要性に気付いた」と多くの学生が回答していた。

実習での体験について、現実の場面のみが作り出す看護する喜びや難しさと共に、自己の新たな発見を実感し、自分自身ができること・できないことを深く自覚させられ、対象者に対する責任を認識しつつ、看護の特質を理解し学習を深めていくことで学生は大きく成長するとある（文部科学省，2002，p.1）。本調査において、困ったことや学びには共通な要素として「知識」「コミュニケーション力」「配慮」についての内容が示されていた。看護の要点といえる項目について、実習中における困ったことや辛かった事として実際に直面したことが、看護の必要性と気づくことになり、その結果、学習を深めることになったと推察する。

次に、実習達成度の平均点の中で低値を示した項目は、記録と報告に関する内容だった。これは、実習達成度の中でも＜コミュニケーション＞と同様に、学内で実際に演習まで行った項目であるため、学生が自らの行動を振り返りやすい。また、実際にバイタルサイン測定後の報告や実習記録用紙への記録を通して“実践”しているため、実習指導者や教員からすでに助言を受けている項目である。このように自分自身を客観的に評価する機会を得たことが、他の評価項目より低い評価になったと推察する。

一方、最も高値を示した項目は「今後の学習課題を明確にすることができる」であった。学生は、実習において自らの学習不足や技術不足などを自覚した内容を今後の学習課題として位置付けることになったと推察する。看護学生の学習は、実践の場で患者に活用できる知識・技術・態度を身につけることが重要であり、それまで学生が経験してきた教育課程の学習姿勢や方法と全く同様とはいかない部分があると考える。そのため１年次前期に基礎看護学実習を行うことは、看護学生として今後の自己の学習の在り方や自分自身の出来ていない部分について、早期に考えるきっかけになったといえる。

また、早期に看護学生としての学習方法を見直すきっかけを持つことは、それまでの学習を見直す期間が短いことから範囲も限られるため修正しやすい。そのため学んだ内容について再学習する負担は軽いことから、その後の学習への意欲につながりやすいのではないかと考える。しかし、そのためには実習での体験において困ったことや辛かったことがあったとしても、学生が自己の新たな発見と肯定的に捉えられるような働きかけが意図的に行われるような指導体制が必要と考える。

本調査の基礎看護学実習時期は７月の中旬から下旬に実施していることから、実習終了後には夏季休暇がある。したがって、今後の課題として、実習によって動機づけされた学習への意欲が維持・向上できるような意図的関わりについて検討することである。

Ⅶ. 本研究の限界

本研究は、１校のみの結果であり、調査数も少ないため全ての初期学生に共通する結果ではなく一般化するには不十分である。今後は、調査対象数を増やして継続していきたい。

Ⅷ. 結論

1．職業に対する「思い」では、看護師を目指す気持ちについて入学～実習前において「高くなった」「かわらない」と回答した学生は90％以上を占め、「低くなった」と回答した学生はわずか8.3％であった。また、実習終了後は、看護師になりたい気持ちが低下した学生は2.8％のみだった。
2．「学び」では、「知識のない未熟な自分」「コミュニケーションの難しさ」「対象に何もできない自分」を困難感として抱いたが、それらを今後の課題として肯定的に捉えていた。
3．早期に基礎看護学実習を行うことは、初期学生の学習意欲を早期に高める要素となる。

【引用文献】

岩脇陽子・滝下幸栄・今西美津恵 他（2009）．早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因．京都府立大学看護学部紀要，17，31-39.

原田秀子（2004）．臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討．山口県立大学看護学部紀要　8，93-98.

駒沢信泰・飯塚徳重・筒井秀作 他（2003）．早期臨床体験実習が医学生に与える影響とその意義について　患者－医師関係に対する医学生の様々な探究も含めて．医学教育，34（3），193-198.

風岡たま代（2005）．看護学生の共感性に関する一考察－職業的同一性との関係－．聖隷クリストファー大学看護学部紀要，13，15-26.

小薮知子・黒田裕子・合田友美 他（2007）．看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第二報）－経年的変化から考える教育的支援－．川崎医療短期大学，　27，25-29.

村山由子・持木香代・久保陽子（2001）．基礎看護学実習の効果を考える（第１報）－有効な基礎看護学見学実習のあり方についての一考察－．神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要，27，65-68.

文部科学省（2002）．大学における看護実践能力の育成の充実にむけて　看護学教育の在り方に関する検討会、（平成14年３月26日）http://www.mext.go.jp/bmenu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm /03/25

大高恵美・伊藤美奈加・牟田能子 他（2006）．日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査（第２報）－社会人経験の有無と学業に対する取り組み、学生生活に対する満足度の関係－．日本赤十字秋田短期大学紀要，10，77-84.

桜井礼子・山口真由美（1999）．看護教育における初期体験学習の経緯と意義．大分看護科学研究，１（1），20-26.

渋谷えみ・池内彰子・坂間伊津美 他（2010）．早期看護体験実習を通した学びと効果－実習後のレポートに記述された内容の分析から－．茨城キリスト教大学看護学部紀要，2（1），55-62.

白鳥さつき（2009）．看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセス構造．日本看護研究学会雑誌，32（1），113-123.

正野逸子・鷹居樹八子・井野恭子 他（2009）．医学部１年次における大学病院での看護活動を中心とした早期体験実習の効果．産業医科大学雑誌，31（4），365-376.

高橋清美・中野榮子（2003）．学生が抱く早期看護実習Ｉの主観的満足感－内発的動機づけによる実習効果．福岡県立大学看護学部紀要，１，29-39.

田邉三千世・杉山恵子・須田雅美 他（2010）．看護教育導入のための臨地実習における学習支援－授業と臨地実習の進度を連動させた効果－．神奈川県立よこはま看護専門学校紀要，６，33-43.

田中美穂・中原るり子・渡邊智佳子 他（2005）．Early Exposureとしての基礎看護学実習Ｉの検討－学生の自己評価結果から－．東邦大学医学部看護学科紀要，19，37-48.